二十二話　きつねのちょうちんこ

あるどこに、百姓やっていたえであったけど。そのえでじっとえったば、道ばたの庚申さまのまえさ、きつねっこ寝ぶかけしていだけど。えではじめどでんしてみたけども、きつねのやつ、あんまり夜中にほっつき歩いておったってしまって、昼寝していだな。少しどでんさせてやれど思って、

「あっえ、おっかねえで、きつねっこだ」

いがにもきつねっこ見でどでんしたふりしておっきた声あげてさかんだど。して足を「どだどだ」とならしたど。ええ気持ちで寝ぶかけしていたきつね、えでさかんだ声聞いで、どでんしてしまって「ぼっ」と三尺ばかり跳ね上って、後も見ねえでどんどん逃げてしまったど。して山の中さかぐれてしまったけど。えでおがしくなって、一人で「あっはっはは」と笑ったど。きつねが逃げたあとを見たば、きつねえだどこさ、「きつねのちょうちんこ」落ちていたけど。きつねのちょうちんこというやつしえ、へらっこの恰好したやつで、「カン」と打たけば、「ポッ」とあかりっこついてしえ、明るくなるおだけど。えで喜んでしまってこれはええ物ふるった、きつねのやつなんぼどでんして逃げだべな、まだえでおかしくなって、一人笑いして、家さそれ持って帰っていったど。きつねのやつ、なんぼくやしがってえたべがな、とっきゃさねえようにしねばなんねえなとえで一生懸命気つけていだけど。きつね、きょう来るべかなと思ってもと思っても来ねえかけど。あした来るべがなと思ってもあしたも来ねえかけど。二日もたち三日もたってもながなが来ねえだし、五日も六日もたってしまったど。初めのうちえでも緊張してしまって気つけでいたべども、だんだん日にちもたってしまったどこで、えでもこんど安心してしまって「くそ。きつねの野郎、おっかねがって、くそも来えねえなと思って安心してらけど。

そしてらば、ある晩げ、えで寝てらば馬屋の方で

「うーん、うーん」

とうなる音、聞けだけど。えで目さまして

「なんだか、馬のうなる音、聞けるな」

と思って、さぎしんで聞てらけど。馬、腹、病んで切ながって、かり板「ガリガリッ」とはだける音、聞けだけど。馬、腹、病んでらこりゃ、てへんだどえでどでんしては、もっくり起きで、もよって馬屋さ行く気になってえだけども、思いだして、きつねのちょうちんこあったけなとあれ持っていぐがなと思って、かがっていだちょうちんこだして「カン」と打だいだけ「ポッ」とあがりっこついたけど。それぶらさげていったけど。

したば馬屋さえってみたば、馬、腹病んで切ながって「うーんうーん」とうなって、寝っ転がっていたけど。

「だだだ。えま治してけら、まてえまでえ」

とえで、薬もって来て、束にして馬屋さ、入っていたけど。柱さきつねのちょうちんこぶら下げてえったけど。して、馬の腹、一生懸命、薬でなでえたけど。

そのうち、あかりっこ、だんだん細くなって「プッッ」と消でしまったけど。えで一生懸命、馬の腹なでいたけど。だんだん腹のいでえやつ落ちついてきて、馬の腹のいでえやつ直ってしまったけど。えで、

「ああ、えかったなあ」

と思って安心してえさいって寝る気になってちょうちんこ持っていかねエばならねえなと思って見たども、なんぼたねだどもちょうちんこねえけど。きつねの野郎、馬さ、嘘、病ませで、ちょうちんこ、をきゃしにきたな、あの野郎。さっさしくったことした。たんだ取らえてしまったな。

きつねというやつ、なかなかずるいもんだえでうんとくやしがったけど。きつねのちょうちんこ、持ってえがえてなんもねえけど。えで残念なことしたなあと思ってガッカリしてしまったど。

どっとはらえ。